

# 吉井源太と明治

《22》

## 原料に適するや否や

吉井源太は、これまで使われてきた原料以外の草木を製紙に使えないかどうかいろいろ試した。他の地方の人が、その土地に生えている草や木が紙原料にならないかと源太のもとへ持ち込んだり、試験を依頼してきたりすることもあった。

明治二十二（一八八九）年に小笠原諸島の人が藪麻黄という草を紙の原料にならないかと、はるばる持ってきたことがある。佐竹助十郎という人だ。八月上旬に源太のもとを訪れてきた。

ノリの力を助けることもわかった。このような結果がでたので、佐竹氏はこれくらいよいよ盛んに栽培する意欲を持った。そして「江州丸に打ち乗り、東京より小笠原へと急ぎけり」と日記に書かれている。

それから少し後、大量の藪麻黄について「製紙原料に適するや否やを試検」し、詳しい結果が出されることになった。

それによると、一転して、この繊維は粗悪で、また、三椏や楮などの原料に比べて歩留まりが極めて悪いことがわかった。特に、

この原料で白紙を作るためには、薬品を多量に必要とするのみならず、通常の製紙を行う場合に比べて大変手間がかかる。よって、この原料は製紙原料には不適

当であるという結論になった。

小笠原という遠い島から

わざわざ持ち込まれた原料であったが、残念ながらもこの結果になってしまっ



シナノキ。樹皮から布が作られる  
(6月下旬、県立牧野植物園)

た。ただ、このような遠いところから高知まで持ち込む人があったということは驚くべきことではないだろうか。源太の紙への取り組みが広く知られていたということや、遠方から原料を届けようとする熱心な人がいたことがわかる。

同じ年、「シナ」というものを送りましたという手紙が源太のところへ届く。この知らせが届いてからも現物がなかなか到着しないので、源太は、まだ届かず残念ですという手紙を送ったりしている。このあと二週間ほど経って、届いた。

しかし、苛性ソーダを入れて三時間煮てみたが煮えないという結果だった。残念ながら、この植物も紙原料にはならないものだった。これはシナノキで、皮を裂

いて糸を作り、それを織ってシナ布が作られる。この布は衣服になるが、このほか酒などの漉袋、船用ロープ、馬具なども作られる。かなり強靱なものであることがわかる。

「日本製紙論」で原料について述べられているところでは、主要原料の他に七島藪（イクサの一種）、藪、桑、竹、ヤブマオウ、ムクベ、イタブ（イヌビワ）が出されている。

しかし、これらはいずれも産出量が少ないとか、処理に手数がかかる、紙にした時に良くないなどと書かれている。なかなか製紙に使うことができる原料にめぐり合わなかったことが良くわかる。

（京大大学院研修員、京都府在住）